

8月3日（日）マルコの福音書12章35～37節

「主は私の主に言われた。「あなたはわたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」（36節）

ここでイエス様は、律法学者たちのキリストについての考え違いを正そうとしています。イエス様は「律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子と言うのですか。」と言われました。ここでイエス様は、メシアとして来られたご自身は「ダビデの子」ではないと否定しようというわけではありません。むしろダビデのような政治的・武力的な人物として現れ、人々を異国の政治的な圧力から解放してくれるメシアのことを律法学者たちは言っていたのでしょう。自分は、そのような意味でのメシアではないと言おうとされたのです。

イエス様は、36節で詩篇110篇1節を引用しておられます。まず「主は、私の主に言われる」とあります。これは、主なる神がダビデのメシア（キリスト）に言われたとの意味になります。そして「あなた（キリスト）は、わたし（主なる神）の右の座に着いていなさい。わたし（主なる神）が、あなた（キリスト）の敵をあなた（キリスト）の足台とするまでは」との意味になります。37節で「ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるのに、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう」というのは、キリストは肉体的な血統だけから見れば、ダビデの子孫として生まれたに過ぎないかもしれない、しかしイエスキリストは、ダビデ自身がこのお方を主と呼び、主なる神が「あなたはわたしの右の座に着いていなさい」と言われるべきお方、つまり神の御子であるキリストだということです。ダビデは、聖霊により来るべきメシヤであるイエス様をどのようなお方か理解した上で、主として告白し、崇めているのです。そして、この詩篇110篇1節を根拠としてイエス様は、ご自分が神であることと、ただ単にダビデの子孫としてダビデがしてきたことをそのまま引き継ぐようなメシヤではないことを言おうとしたのです。そしてここに書かれてあるとおりに、イエス様は私たちの罪のために十字架にお架かりになりましたが、三日目によみがえられ、その後、天に昇り、全能の父なる神様の右の座にお着きになりました。そして神に敵対するあらゆる悪や敵を滅ぼし尽くし、私たちの救いを完成してくださるために、再びこの地上に来てくださいます。

イエス様は、当時の律法学者が考えていたよりもはるかにすばらしい救い主でした。同様に神様は私たちに対しても救い主を知り、この方を信じるようにして下さったのです。36節で「ダビデ自身が、聖霊によってこう言っています。」とありますが、まさにダビデも聖霊の働きを通してキリストを正しく理解していたのです。それと同様に私たちも聖霊の働きを通して、キリストのことを正しく理解することができるのです。

8月4日（月）マルコの福音書12章38～40節

「律法学者たちに気をつけなさい。彼らが願うのは、長い衣を着て歩き回る事、広場であいさつされる事、会堂で上席に、宴会で上座に座る事です。」（38、39節）

イエス様は「律法学者たちには気をつけなさい。」と言われていましたが、彼らの何に気をつけるようにと言われたのでしょうか。

それは彼らの演出です。「長い衣を着る」のは、彼らが律法学者であることがすぐに分るようということでした。それを着て歩き回ることで、人の目についてあいさつされることを願ひ、また広場のようにわざわざ人の集まる所へ出かけて行き、そのような場であいさつされることを願ひ、人々の尊敬を集めることで、会堂で上席に、宴会で上座に座ることを願ひました。また、彼らは長い祈りをしましたが、これは自分たちがいかに敬虔そうに振る舞っているのかを示すためでした。そのように振る舞うことで、彼らの自尊心や虚栄心を満足させようとしたのです。さらに、「やもめたちの家を食い尽くし」とありますが、彼らは律法の専門家という立場を利用しながら、律法の解釈をねじ曲げて、それを悪用することによって、弱い立場にあるやもめたちを搾取していたようです。

ここで律法学者たちの問題点をともに考えてみましょう。まず一つが、彼らの目は神様に向かず、人に向いていました。神様が自分をどう見ておられるかではなく、人が自分をどう見て、評価するかということに関心がありました。二つ目が、彼らは自分の自尊心が満たされることを喜んでいました。しかし「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」（マルコの福音書10章45節）と言われたイエス様のみこころとは全く逆の姿でした。三つ目が彼らには神様を恐れる気持ちが全くありませんでした。神様は律法学者たちの姿だけではなく、その心や思い、考えなどすべてを知っておられて、その上でさばかれるお方であることを彼らは考えていませんでした。そして、律法を深く知ることのできる立場にありながら、律法の恵みに生きようとしなければ、より厳しい罰を受けることは当然のことです。

私たちは、最後にすべての人をさばかれる主の御前に、どのような歩みをしているでしょうか。また救いの恵みにあずかった者として、どのように主を証しているのでしょうか。

8月5日（火）マルコの福音書12章41～44節

「皆はあり余る中から投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っているすべてを、生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。」（44節）

献金箱は、神殿の婦人の庭と呼ばれる所に、十三個置かれていて、ラツパ型に上に向かって開いていて、人々がそこに投げ入れることができるようになっていました。そして献金箱の向かい側に座り、群衆がお金を献金箱に投げ入れる様子を見ておられたイエス様は、多くの金持ちがたくさん投げ入れる中、一人の貧しいやもめが来て、レプタ銅貨二枚を投げ入れたのも見ておられました。それは一コドラントに当たると説明されていますが、それは当時の労働者の一日分の賃金であった一デナリの六十四分の一にあたる金額でした。決して献金としては多くはない額でしたが、イエス様は弟子たちを呼び寄せて、「この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れている人々の中で、だれよりも多くを投げ入れました。」と言われました。イエス様がこのやもめの献金を評価された理由は、「皆はあり余る中から投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っているすべてを、生きる手立てのすべてを投げ入れたからですから。」ということだったのです。このやもめは、「生きる手立てのすべてをささげる」ほどに主のためにすべてを与え尽くそうといたしました。まさに犠牲を惜しまない愛のささげ物でした。それはイエス様のみこころにも通じるものでした。というのは、イエス様ご自身が人類の救いのために、十字架の上でいのちをもささげるほどに与え尽くされたお方だからです。さらに、このやもめは決して人の目を気にするのではなく、常に神様を意識していました。だからこそ堂々と多くの金持ちに混じって、たとえ小額であっても、それをささげることができたのでしょう。これは昨日見ました、常に人の目を気にし、人からの称賛や尊敬を受けることを願い、そのことを喜びとしていた律法学者の姿とは何と異なることだろうかと思えます。

私たちは、イエス様がいのちをささげてくださったことを知りました。これは金銭には代えられません。それほどの代価を払って罪の贖いを恵みにより受け取った私たちは喜んで主に生きる手立てのすべてをささげるほどのささげ物をしていきたいと思わされます。またイエス様が献金箱に向かってすわり、金を投げ入れる様子を見ておられたように、今もイエス様は私たちが献金をする様子を見ておられます。それは、私たちがいくら献金したのかということよりも、どのような思いや信仰を持ってささげているかを見ておられて、その献金を評価しておれるのです。私たちが献金をささげる時に、イエス様から「献金箱に投げ入れている人々の中で、だれよりも多くを投げ入れました。」と言っただけの私たちでありたいと願わされます。

8月6日(水) マルコの福音書13章1、2節

「この大きな建物を見ているのですか。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」(2節)

イエス様が宮から出て行かれるとき、弟子の一人が、「先生。ご覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」とイエスに言いました。イエスの時代の神殿は、ヘロデ王が紀元前20年から増築を始め、紀元64年までの84年間という長い年月をかけて完成した神殿で、ソロモンの神殿の二倍の規模を誇っていました。そしてこの神殿に使われていた石について、ヨセフォスは高さ8キュビト(3.6メートル)、幅12キュビト(5.3メートル)、長さ25キュビト(11.2メートル)と説明し、石だけでもどれほど大きかったかが分ります、また神殿自体が金箔でも覆われていて、まさに「すばらしい建物」と誰が見ても感嘆するようなものでした。恐らく、ヘロデ王はイドマヤ人でありましたので、ユダヤ人の歓心を買うために、このような神殿を建てたのではないとも言われています。そして、この神殿はユダヤ人の誇りでありましたが、次第に高慢の象徴ともなっていました。神殿を暴利を貪るための強盗の巣にしたことも、その一つの証しと言えます。

イエス様は弟子たちに向かって、「この大きな建物を見ているのですか。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」と言われました。恐らくそれは弟子たちにとっては考えられないことだったのでしょう。ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレがひそかにイエス様に「お話してください。いつ、そのようなことが起るのですか。また、それらがすべて終わりに近づくときのしるしは、どのようなものですか。」と尋ねました。弟子たちにとっては、神殿が破壊されるなどということは、とても考えられないことだったのでしょうし、もしそのようなことがあるとすれば、それは世の終わりの時に違いないと思ったことでしょう。しかし、それはユダヤ人の高慢に対する神のさばきが下ることについてのイエス様の預言でした。実際にイエス様が語られたとおりに、紀元70年にローマ帝国によって神殿は完全に破壊され、焼き尽くされてしまいました。

神殿が建てられ、そこで唯一まことの神を礼拝することができることは大きな恵みですが、そのことも人にとっては高慢になる理由となりえます。つまり、私たちは常に、またあらゆることで高慢に陥る可能性があるということです。ですから、常に主の恵みをおぼえて、主に感謝をささげて、誇ることなく、傲慢になることなく主の御前を謙遜に歩ませていただきたいと思わされます。

8月7日(木) マルコの福音書13章3～13節

「しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」(13節)

「お話をください。いつ、そのようなことが起こるのですか。また、それがすべて終わりに近づくときのしるしは、どのようなものですか。」(4節)と尋ねる弟子たちに対してイエス様は、「いつ」については答えず、しるしについて語っています。決していつ世の終わりが来るのかについては明かされていないのです。そして、昨日見ました神殿の破壊については、世の終わりにおける神のさばきの一つの型と見ることもできます。つまり、人々の罪を主はさばかれ、何も残らないほどに徹底的に滅ぼし尽くされるということです。

イエス様が語られるしるしの一つが宗教的な混乱ということです。「人に惑わされないように気をつけなさい。」との警告から始まる第一の前兆は偽キリストの出現です。実際に紀元2世紀に入ると、シメオン・バル・コセバがメシヤの名のりを上げ、ラビ・アキバがそれを信じて独立戦争を起こしたりしました。また自分を再臨のキリストと称する文鮮明による統一教会のようなキリスト教の異端は、大いに人々を惑わしています。実際に、韓国では14人の人が自分を再臨のキリストと称していて、もっと増える可能性があります。まさにイエス様の言われたとおりであり、時代は確実に世の終わりに向かっていることを思わされます。

二つ目のしるしが、戦争や戦争のうわさを聞くということです。(7節) イエス様がこれらのことばを語られていた時は、パックス・ロマーナ(ローマの平和)と呼ばれていた時でしたが、この後、イエス様が言われたとおりに、さまざまな争いが起こることとなります。そして二十世紀に人類は二つの世界大戦を経験し、その後もさまざまな民族紛争が世界のあちこちで絶えず起こっています。さらには現代を生きる私たちには核兵器の恐怖もあります。また「あちこちで地震があり、飢饉も起こるからです。」と言われていたように、私たちも阪神大震災や東日本大震災を経験いたしました。そして東南海地震の恐怖もあります。今も世界のいろいろな地域で地震、洪水、ハリケーンなどによって大きな被害が出て、多くの人命も失われています。またアフリカやアジアの様々な地域で飢饉が発生し、最近ではガザにおける飢饉が深刻だとも言われています。まさに今の世界の現状はイエス様が言われたとおりになっています。

9節から今度はイエス様は宗教的迫害について語り始めます。「人々は、あなたがたを地方法院に引き渡します。あなたがたは会堂で打ちたたかれ、」とありますが、クリスチャンは異端視され迫害されることが語られています。特に、神を礼拝すべき会堂で、ユダヤ人からキリストの弟子たちが迫害されるというのは、何と皮肉なことかとも思います。次に「わたしのために、

総督たちや王たちの前に立たされます。」と言われているように、政治犯としてクリスチャンは迫害されることがあります。基本的にキリスト者は、良き市民として証しを立てることが求められていますし、私たちは権威に対しては神が立てられたとの信仰のゆえに従うべきです。ところがもし国家がその権威を濫用して、私たちの信仰をおびやかすようなことがあれば、私たちは断固としてそれに反対し、**キリストのゆえに**戦わなければなりません。それとともに、そのような迫害されるときは、キリストを証しするときともなりうることをイエス様も語っておられます。10節には全世界的なレベルでの福音の宣教が語られていますが、迫害を通して福音は宣べ伝えられるのです。そして12、13節には家族間からの迫害をもキリスト者は経験することとなり、時には「キリストの名のために」憎まれることもあると言われています。

時代が世の終わりに向かって進んで行く中で、様々なことが起り、人々は生きていく上で常に不安を感じることでしょう。しかし、私たちは世の終わりに向かう中で、必ず起ることとして知らされていますので、決してあわてることはありません。むしろ、私たちは惑わされず、信仰的に困難な状況に置かれても背教に陥ることなく、「しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」とありますように、最後には必ず救いの完成を見る時があることを信じ、忍耐をもって歩んでまいりましょう。

8月8日（金）マルコの福音書13章14～20節

「もし主がその日数を少なくしてくださらなかったら、一人も救われないでしょう。しかし、主は、ご自分が選んだ人たちのために、その日数を少なくしてくださいました。」(20節)

14節で言われている「荒らす憎むべきもの」とは、反キリストが神の宮を汚すことを意味しています。(ダニエル書11章31節；12章11節参照)そして「立つてはならない所」とは、具体的にエルサレム神殿にある全焼のいけにえの祭壇を指しています。このような状況は、実際に紀元前168年にセレウコス朝のアンティオコス四世エピファネスによって実際に起りました。彼は神殿の全焼のいけにえの祭壇の上に、異教徒の祭壇を建て、そこで律法に

よって汚れた動物に分類されている豚をほふり、ユダヤ人が律法に従ってささげてきたいけにえを禁止しました。また、ローマ帝国は紀元70年にエルサレム神殿を破壊しましたが、その過程で東側の門の向こうに軍旗を立てていけにえをささげました。ルカの福音書21章20節には「しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。」とされていますので、もしこのような状況が起ったなら、それはユダヤの滅亡の時が近いということですから、「ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。」とされています。戦いが起った時に最も重要なことは、物の確保ではなく、いのちを守ることです。当時のイエスラエルでは屋上は、祈り、話しをするため、亜麻を乾燥させるなど、日常的に使われていました。その屋上にいる人たちは、家から何かを持ち出そうと下に降りたり、中に入ったりしてはいけませんとされています。また畑にいる人たちは、上着を取りに戻らないで、すぐに逃げなければなりません。17節に身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れですと言っていますが、それは彼女たちがすぐに逃げるのができないからです。さらに、「ただ、このことが冬に起こらないように祈りなさい。」(18節)と言われたのは、冬の寒さの中を逃げるのが困難なことと、冬はヨルダン川が増水するので、ヨルダン川を渡って、川の東岸のベレヤ地方へ逃れることは困難をきわめるからでしょう。「その日は、神が天地を創造された初めから、今に至るまで、今だかつてなかったような、またこれからもないような苦難の日だからです。」(19節)とありますが、それは飢えや虐殺等で多くの人々が苦しみの内に死んでいったことを表しています。ヨセフスという歴史家によれば、「戦争の始まりから終わりまでに捕虜になった人々の数は、9万七千人に達し、包囲攻撃中に死んだ者の数は110万人であったと言われています。そのころのユダヤ人の人口は270万人と推計されますので、約40%の人が4年間のうちに亡くなるという苦難を味わったのです。20節で「もし主が、その日数を少なくしてくださらなかったら、一人も救われないでしょう。しかし、主は、ご自分が選んだ人たちのために、その日数を少なくしてくださいました。」とありますように、主のあわれみがなければ死者の数はもっと増えていたことでしょう。これまで経験しなかったような苦難の中にあっても確かに主のあわれみは残されていることを思います。ですから、私たちがキリスト者として経験したこのとのない苦難の中を通される中にあっても、主のあわれみはなおあることを信じたいと思わされます。

8月9日（土）マルコの福音書13章21～23節

「そのときに、だれかが、『ご覧なさい。ここにキリストがいる』とか、『あそこにいる』とか言っても信じてはいけません。」(21節)

今日の箇所は、6節の「わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそ、その者だ』と言って、多くの人を惑わします。」と関連があります。そして、そのように言う者たちは、偽キリストであり、偽預言者ですから、決して信じてはなりません。そして注目すべきことは、偽キリストや偽預言者の目的は、選ばれた者たちを惑わすということです。つまり、神によって選ばれた者たちを惑わし、できればその者たちを背教へ導こうというのです。そして彼らが行うしるしや不思議がどのようなものかは分かりませんが、恐らく選ばれた者たちの目を引くようなことをするという事なのでしょう。そもそも選ばれた者たちは、目に見えるところで判断するのではなく、みことばによって再臨のキリストかどうかを判断すべきです。23節にイエス様は警告として「だから、気をつけていなさい。わたしは、何もかも前もって話しました。」とされています。イエス様が語られたことは現実のこととして成就しました。イエス様からの警告のことばを受け入れて従った者は救われました。そして今も主は聖書を通して私たちに警告のことばを与え続けています。そのみことばに謙遜に従って、後で決して後悔しないような者でありたいと思わされます。例えばイエス様が再臨される時のことについて26節には「そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見ます。」とありますから、決してしるしや不思議によって惑わされてはなりません。それがみことばを信じて待ち望むということです。

イエス様が預言しておられるように、常に偽キリストたちや偽預言者が現れることでしょう。そのような中で、私たちはみことばによってしっかりと武装したいと思わされます。みことばによって自らの信仰を守りつつ、みことばによって正しい信仰の判断ができるように祈っていかねばなりません。そのためにも私たちは日々みことばに親しみ、みことばを心に蓄えつつ歩む者でありたいと思わされます。